二松學舍
松苓會報

CONTENTS

P2 卒業生のみなさんへ
P3 平成27年度ホームカミングデー
P7 教壇を去られる先生
P8 松苓会各支部活動報告
P14 北から南から
P15 活躍する卒業生
P16 大学だより
P17 キャリアセンターより
P18 教職支援センターから
P19 活躍する学生諸君
P20 松苓会の歩み(6)
P23 松苓会支部長名簿　松苓日誌抄
P24 『二松學舍大学の挑戦』の紹介
P24 寄付者芳名・編集後記

No.54
2016年3月16日

卒業生の皆さんへ

二松學舍松苓会
会長
廣田　克己

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

「二松學舍松苓会」は卒業生の皆さんの入会を歓迎いたします。

「二松學舍松苓会」は専門学校1期生の卒業とともに昭和6年に創設され、本年が85年目になります。開塾以来の本学の卒業生は約3万人になりますが、皆さんの先輩たちは様々の分野において世界中で活躍しています。また全国47都道府県に支部を持ち、支部ごとに活動をしています。これから皆さんが住む地域に支部があり、皆さんはその支部の所属となりますので、支部には必ず連絡を取ってください。

さて、まず申し上げたいのは、卒業を最も喜んでいるのは保護者であり、皆さんが卒業して最初にすることは、保護者の皆さんに感謝の気持ちを伝えることです。

大学進学が当たり前になっている時代とはいえ、大学4年間を経済的、精神的に支え続けることは大変なことです。いえ、大学だけではありません。生まれてから今日に至るまでの子育ての苦労は今の皆さんには実感できないかもしれませんが、想像してください。想像力は人間の持つ優れた能力の一つです。それが人の痛みが分かり、人を思いやることに繋がります。

次に皆さんが今なすべきことは、これから飛び込んでいく場所で自分の居場所を早く作ることです。新人の居場所は与えられるものではなく、自分で作るものです。これまで学び、考え、実践してきた知識や知恵、経験を駆使してください。また家庭人、社会人としてのポジションも大切です。これからが皆さんの人生の本番というべき生活なのです。「若者は将来が長いが、今しか見ない。老人は将来が短いが、長い先を見る」と言った先人がいます。将来を意識することは大切ですが、周りが見えるようになってからでも遅くありません。これからの生活には当分は余裕などないと思います。同窓会には余裕ができてからでもいいですから繋がりだけは持っていてください。「二松學舍松苓会」はいつでも皆さんを待っています。

以上、「二松學舍松苓会」を代表して、大いなるエールと歓迎の言葉を送ります。

卒業生のみなさんへ

二松學舍大学
学長
菅原　淳子

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在学中の数々の思い出を胸に、二松學舍大学を巣立ち、新たな人生の扉を開こうとしていらっしゃる皆さん。皆さんは目の前にある様々な可能性を持った道を選ぶことも、また自ら道を切り開くことを選ぶこともできます。どうぞ自信を持って新たな一歩を踏み出していただきたいと思います。

在学中には学業を通して専門的な知識を身につけただけではなく、サークルやアルバイト、あるいはボランティアなどの社会活動を通じて、視野や人間関係を広げ、たくさんの経験を積まれたことと思います。それらの一つ一つが、これからの皆さんの人生の中で貴重な経験として生きてくると確信しています。社会人となった時に、大学で学んだ専門を必ずしも生かせるわけではないかもしれません。しかしながら、身につけた考え方や学びの技術を生かすことによって様々な分野で活躍することは可能ですし、幅広い基本的な知識や教養が皆さん自身の汎用能力を広げてくれると思っています。情報が溢れ、社会が急速に変化している今日にあって、皆さんが社会人としての自覚と責任を持って、社会に貢献して下さることを期待しています。

皆さんにとって、大学を卒業することは大学での学業の終了を意味しますが、決して学びの終了ではありません。むしろこれからが始まりであって、これまで学んだことを基礎にこれからの自分の人生をスタートさせることになり、学びも続くことになるでしょう。就職して仕事に就けば、新たに学ばなくてはならないことがたくさんあるでしょう。大学院に進学すれば、これまでの研究をさらに深めていくことになります。また、将来、大学で学んだこととは異なる分野の学びに興味を覚えるかたも出てくるかもしれません。いくつになっても学びなおしは可能です。皆さんには是非、生涯を通して学ぶ姿勢を持って頂きたいと思います。

たくさんの可能性を持っていらっしゃる皆さんの前途が希望にあふれるものであることを祈って、皆さんに贈る言葉と致します。

ホームカミングデー

平成27年12月6日（日）、午前10時から第11回ホームカミングデーを開催し、全国から約150名の参加者が集まりました。

本学のホームカミングデーは、卒業生の皆さんに、在学生の活躍する姿を知って頂きたいとの思いから、昨年度まで4回続けて大学学園祭と同時に開催してきましたが、今年度は、大学1号館の改修工事のため学園祭との同時開催はできませんでした。

地下2階の中洲記念講堂で、午前10時から開会行事が行われ、アカペラサークルの学生によるアトラクションや、廣田克己松苓会会長（文38）の挨拶、本学町泉寿郎教授（文60）による講演「三島中洲と二松學舍」を行いました。また、講演会終了後、靖国通り沿いに新しく建設された4号館や大学資料展示室の見学も実施しました。また、今年も松苓会文庫（卒業生の著書等）の展示がありました。

午後1時から、九段1号館の13階ファカルティ・ラウンジで行った懇親会は、菅原淳子学長の挨拶、五十嵐清常任理事（文44）の祝辞に続き、松田存名誉教授（文26）による乾杯の発声で始まりました。先輩や後輩で輪になったり、名誉教授や現職の大学教職員を囲んで話し合ったりして、和やかに懇談する姿が見られ、最後に、参加者全員で校歌を斉唱して散会しました。

ホームカミングデーに併せ、11月30日～12月6日に、九段1号館地下3階の大学資料展示室の周囲を会場に開催した卒業生作品展には、書や写真など36点の出品がありました。この場所は書道教室の近くでもあり、卒業生が生涯にわたって作品に情熱を傾けている姿に、学生にも大きな刺激を与えることができました。学生の大きな励みにもなったことと思われます。

例年とは違う形での開催となりましたが、参加者からは意義のあるホームカミングデーだったとの声が多数寄せられました。

ホームカミングデー

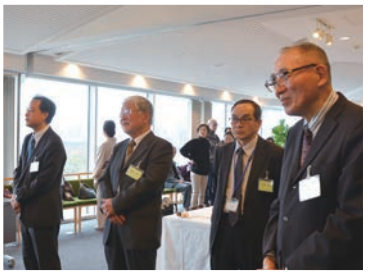
●参加者インタビュー

○柏の附属高校から二松で7年間、学んだ。恩師やゼミ生に会えるのを期待して参加しているが、残念ながらまだ、再会できていない。午前の町先生の講演は、本学の歴史をあらためて、認識するよい機会だった。参加2回目。（菊地浩平　政16　千葉）

○今回は懇親会のみの参加。目的はゼミの押野先生に会うため。期せずして、サークルの先輩方にもお会いでき、懐かしくなった。今後、ホームカミングデーに望むのは、まだまだ参加数が少ない政経だが、学部だけで集まることができる時間、スペース（コーナー？）を設けていただき、互いの現状報告ができると嬉しい。参加3回目。（新井結美　政19　千葉）

○在学中は、今関茂先生のゼミで、かな文字を徹底的に学んだ。昨年、初参加し懐かしい友に再会。それで、今年も参加。作品展見学。同期の出品あり、刺激を受けた。（中村俊子　文49　神奈川）

ホームカミングデー



松苓会からのご案内

○松苓会第 21 回定期総会

平成 28 年 6 月 11（土）

○ホームカミングデー（予定）

平成 28 年 10 月 29 日（土）

○参加は2回目。在学中は難波正久先生のゼミで漢字を書き続ける学生時代だった。夫は文48卒の柴田善達。長野・東御市の曹洞宗興善寺を継いでいる。息子も二松で学び、夫婦、親子ともに二松生。息子が跡継ぎとして修行から戻ったため、初めて夫婦参加が叶った。参加は2回目。（柴田すま子 文49　長野）

○在学中は、小林一郎先生の近代文学ゼミ。同期参加がいつも3人ほどで固定しているのが残念だが、代を越えて卒業生が集まることができるのは、少人数制の本学ならでは。教職に就いているため、ホームカミングデーなど、実利にもなる。また、ホームカミングデー参加がきっかけとなり、松苓会群馬支部での活動にも関わらせてもらうことになった。百数十人の参加数は、13階のスペースにはちょうどのアットホームさだが、拡大を考えるには、もっと別のしかけも要るだろう。参加は、7、8回目。（金田仁志 文53　群馬）

（敬称略）

三島中洲と二松學舍

今年度ホームカミングデーは、午前11時から、本学の町泉寿郎教授による講演会が行われました。

演題は、「三島中洲と二松學舍」で、本学町泉寿郎教授がパワーポイントを使用して参加者に分かりやすくお話ししてくださいました。

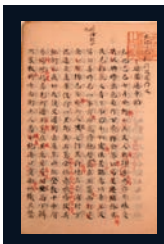
卒業生からは、本学創立者三島中洲の生い立ちや業績、二松學舍開設からの歴史を知ることができ、大変好評でした。講演内容の一部を当日の資料から抜粋して掲載いたします。

なお、講演内容の全部を松苓会ホームページに掲載しますので、併せてお読みいただきたいと思います。

①三島毅

（中洲1831～1919）

- 天保元年12月9日（西暦1831・1・22）に備中窪屋郡中島村（現倉敷市）の庄屋の家（西三島家）に出生。
- 三島家は、天正2年に毛利軍に攻略されて滅亡した三村氏（備中松山城主）の一族で、鬼身城主上田実親の子 澳伝次郎吉親を家祖とする。



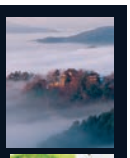
方谷の家塾牛麓舎での中洲の修学のあと16歳時の「遊圓通寺記」

備中松山藩儒山田方谷

のちに備中松山藩士になった中洲が家塾を開いた虎口渓舎の趾

幕末期の活躍

- 藩主板倉勝静が老中に昇任。これを山田方谷が支え、方谷門下の両雄中洲と川田剛は、川田が江戸、中洲が国元で事にあたる。
- 「探辺日録」（1854）
- 「西国探索録」（1862）
- 藩校学頭、勘定方、隣好掛、洋学総裁を歴任。
- 鳥羽伏見敗戦後、岡山藩兵による鎮撫使を家老とともに迎え、松山城下の開城について交渉し、藩主の名誉を守りつつ武力衝突を回避。



大審院判事廃官後
→自活と漢学振興のため二松学舎設立

- 明治11東京師範講師
- 明治12東大講師　明治14教授
- 明治21大審院検事（民法草案）
- 明治28帝大講師
- 明治29宮内省東宮御用掛（川田剛の後任）

- 東京大学の教官として漢文を講じ、東京学士会院会員（日本学士院の前身）・文学博士でもあった。晩年には宮中で明治天皇や大正天皇に漢文・漢詩を講じた。

②二松学舎

- **明治5学制**
- **明治10「私立漢学開業願」麹町区壱番町に二松学舎(中学私塾)を開く**
- **明治12教育令　→私立中学の位置づけを失う**
- **明治13(改正)教育令　→各種学校となる**
- **明治14中学校教則大綱(和漢文・英語・数学理科の学習時間各25%)　→英学塾・算学塾・漢学塾**
- **明治19中学校令・尋常中学校ノ学科及其程度**
  →近代的学校制度への移行と共に入学者激減

初期の生徒の進学先

- 陸軍士官学校：山縣伊三郎、福島安正、花田仲之助、松井庫之助、橘周太
- 海軍兵学校？
- 司法省法学校(明治17入学の第4期生まで、明治18に東大法学部に吸収)
  明治13尾立維孝ら15人、明治16国分三亥・能勢萬ら14人、明治17織田萬・岡村司ら6人
- 東大古典講習科　明治15国書課前期：安井小太郎、落合直文　明治16漢書課前期：熊田鉄次郎、池上幸次郎　明治17漢書課後期山田準、長尾槙太郎、黒木安雄、児島献吉郎ら
- その他：実業(紡績・金融)、政治

「漢学大意」（明治12年）

- 目的：漢学ノ目的タル、己ヲ修メ人ヲ治メ、一世有用ノ人物トナルニ在テ、記誦詞章ノ一儒生トナルニ在ラス。
- 具体的内容：故ニ仁義道徳ヲ以テ基本トナサヽル可ラス。是経書ノ課アル所以ナリ。
- 又古今時勢ノ変遷制度ノ沿革ヲ知リ、変通ノオヲ長セサル可ラス。是歴史ノ課アル所以ナリ。
- 然ルニ其学ヲ事業ニ施サント欲スレハ、文章ヲ借テ、之ヲ暢達セサル可ラス。若シ又当時ニ不遇ニシテ事業ニ施ス能ハサルモ、文章ヲ借テ其学フ所ヲ伝ヘ、天下後世ノ用ニ供セサル可ラス。故ニ文章ハ遇不遇ニ関セス、其学ヲ活用スルノ器具ナレハ、必ス之ヲ学ハサル可ラス。是文章ノ課アル所以ニシテ、之ヲ学ヘハ軌範ヲ古今ニ取ラサル可ラス。是諸子又ハ文集ノ課アル所以ナリ。詩ニ至テハ、必用ナラサルカ如シト雖トモ、是亦文章ノ一端ニテ言志ノ用アレハ、其課ヲ廃ス可ラス。

各種学校としての歩み

- 明治20代の入学者激減を経て、日清戦争（1894～95）の頃から、東洋学が興隆。
- 明治30代には、文部省において中等教育から漢文を削減・廃止の動き
- → 広く世間に漢学の必要性を訴えるべく、財団法人二松義会を設立（1903）
  「東洋固有の道徳文学の維持・拡張」
- 文部省検定試験（文検）受験者のためのコースも増設

専門学校への歩み（昭和3）

- 漢学振興に関する国会建議（大正10～12）

- この建議を受けて、国庫から予算が支出され、大東文化学院が創立（大正12）
  「本学院は本邦固有の皇道及国体に醇化せる儒教を主旨として東洋文化に関する教育を施すことを目的とする。」

専門学校設立趣意書（昭和2）

「…近年一般の人心物質に偏重し階級闘争を是認する等悪化の兆候著しく、殊に青年子弟は国体の尊厳を弁へず忠孝仁義の大道を陋視し軽佻詭激の風漸く瀰漫せんとするに至る。本舎は茲に従来の目的を弘布且つ徹底せしむるには、専門学校を設置し国語科を併置して国体及国民道徳の真義を研修体得せしめ、国語漢文に通ずる多数の堅実なる中等教員を養成して、之を各地の中等教育に従事せしめ、以て人心の匡救正道の宣揚を勉めんとするものなり」

大学への歩み（昭和24）

- 昭和20.3.10　戦災により焼失
- .8.17　代々木教会で再開
- 昭和21.11.23　宇都宮徳馬・明石元長・塩田良平の三理事体制
- 昭和23.4　二松学舎高校開校
- 昭和24.4　二松学舎大学開学
- .8.　鎌倉アカデミアとの合併を模索

山田準専門学校初代校長

「那智佐典日記」

松苓会創設85周年記念式典・祝賀会の御案内

二松學舍松苓会は、昭和６年に二松學舍専門学校第１回生の卒業と同時に「二松學舍専門学校松苓会」として創設されました。本年は創設85周年を迎えます。これを記念して85周年記念式典・祝賀会を以下のとおり開催いたします。会員の皆様には是非ご参加くださるようご案内いたします。

期　　日　平成28年６月12日（日）
会　　場　二松學舍大学九段校舎１号館
受付開始　午前　９時30分
記念式典　午前10時　中洲記念講堂
講演会　午前10時30分　中洲記念講堂
講師　学校法人二松學舍
理事長　水戸英則　先生
演題　「いままでの二松學舍。
これからの二松學舍。」

祝賀会　午後０時30分　13階ラウンジ
会費3000円

記念式典・祝賀会に出席を希望される方は、松苓会本部に卒業年・学部・氏名・住所を記名のうえ、５月10日までにハガキ、ファックス、Ｅメールまたは電話でお申し込みください。

申込先　二松學舍松苓会事務局
〒102-8336　東京都千代田区三番町６番地16
二松學舍大学内
電話 03-3261-7408　FAX 03-3261-8914
Ｅメール　shourei@nishogakusha-u.ac.jp

教壇を去られる先生

定年退職を迎えて

染谷武彦

私が本学に着任したのは平成３年の４月だ。それまで私は芝浦工業大学工学部、早稲田大学商学部、横浜国立大学経済学部の三つの大学で非常勤講師を勤め、マルクス経済学・露語・ソ連経済などを担当していた。夜間にはお茶の水にあるニコライ堂（日本ハリストス正教会東京復活大聖堂）付属のニコライ学院で露語講師、通年スポットで日商岩井株式会社（現・双日株式会社）嘱託の露語通訳の職にあった。本学に着任するきっかけは横浜国立大学に勤務していたころ、当時学部長だった本橋渥先生の招きによるものだ。本学が新たに国際政治経済学部を発足させる段になったのは、伝統の文学部単一大学から新学部を併設して時代の要請に応えんとせんがためと聞いている。新学部は当時横浜国立大学経済学部の事務長を務めていた小池氏を理事長として発足した。氏は二松學舍大学出身者だ。そこで氏は学部スタッフの人選を同学部長であった本橋先生に任せたと思われる。人選に当たり本橋先生のスタンスは基本的に早稲田大、慶応大など私大出身者を母体とするものだった。基本的にというのは、発足スタッフの全員が私大出身者とは限らなかったからだ。中には東大出身者もいた。

かくして私は本学の専任講師となったのであるが、早稲田大学商学部の講師は引き続いて現在に至るまで継続させた（聞けば同学部では私の去るのと同時に露語を選択外国語から外すという）。それ以外の職は全て引いた。非常勤から専任への転化は生活面でも大きな変化だった。長く非常勤に甘んじたのは学生時代に多少とも左翼活動に関わったためだ。全共闘。学生運動は既存の権威を否定し、大学解体を呼号していた。運動から離脱し学究を決め込む大学院進学はうしろめたさもあった。私はソ連が健在だった期間にソ連研究を志して社会主義の可能性に賭け、他方で運動から身を引いた。もちろん、ソ連が社会主義の理想からかけ離れて病んだ国であるのは自明だったが、ベトナム戦争に見られるように、帝国主義の抑圧には真っ向から対決する姿勢は評価できた。私の大学院生活で指導教授への絶対的恭順はありえず、もって課程修了後の就職の世話にありつく見込みは希薄化した。非常勤講師の生活は必然だった。ソ連が崩壊してロシアになった。私の研究対象がまるまる崩れた。

やや専門の話に立ち入る。ソ連は建国以来一貫して労働力商品化の廃止を志向していた。それが不可能だと分かるのに70年を要した。今、労働力商品化の止揚を宣揚したり、これに類することをあれこれむしかえす向きもある。それは不可能な共産主義に夢を託せというのと同じで、そこに学問的誠実さを見るのは困難だ。

話を元に戻す。私を支えたのはロシア語の能力だけになった。本学就任の前に共訳の業績はあるものの、二松學舍大学奉職期間中に私はそのロシア語で翻訳を一冊も出せなかった。現代ロシアの政治経済的・社会的諸状況に制約され、翻訳するに値するものを見つけられなかったという言い訳もないではないが、怠慢は怠慢である。不発のまま大学を去る。

早稲田大学文学部露文学専修卒業
早稲田大学商学研究科経済学専修修士
早稲田大学商学研究科経済学専修博士課程終了
ソ連邦モスクワ国立大学露語専修終了
二松學舍大学奉職、25年間勤務

松苓会各支部活動報告

〈出席・参加者欄は敬称略〉

北海道支部

◆道南分会総会

事務局長　山﨑郁紀

平成27年度道南分会総会は、10月3日（土）函館市五稜郭〈清寿司〉で開催されました。

今回は、北見北斗高校から南茅部高校長に異動してきた戸波氏や、江別高校から松前高教頭に異動してきた小島氏、それから脳出血で左半身不全となり2年程参加できなかった南部前分会長も参加されて11名と大盛会となりました。

総会では、いつもながらの函館ローカルな話題や大学の変遷に伴う（九段→柏→九段）学生時代の話で盛り上がりました。

二次会は、駅前大門地区に市電で移動しカラオケスナックに。小島氏や吉川氏の美声に聞きほれました。

〈参加者〉

南部知正（文37）　田島基義（文38）
開原正信（文39）　戸波　徹（文49）
古賀俊治（文40）　荒井　到（文51）
小島政裕（文55）　吉川　肇（文59）
吉川真理絵（文60）増井義昭（文39）
山﨑郁紀（文36）

函館市・五稜郭清寿司にて

◆道東分会総会

事務局長　山﨑郁紀

平成27年度道東分会総会は、10月17日（土）帯広市内「旬彩酒房海彦・山彦」で開催されました。今まで道東分会総会は、北見と釧路で行われてきましたが、同窓生の比較的に多い帯広で今回は開催されました。

道東分会は、網走、釧路、根室、十勝と北海道半分を占める広い地域の為、どこで開催しても、大半の参加者は泊りがけとなるので第一回（川湯温泉）のように温泉宿泊でやろうとの意見が多く今後検討してみることになりました。なお、澤向分会長の筆になる見事な横断幕、教え子の店のせいかすばらしい料理に感激しました。

2次会は、帯広屋台村の一店舗を借り切り屋台の楽しさを味わいました。

〈参加者〉

澤向　崇（文39帯広）川谷文雄（文39北見）
菅野敦子（文51音更）五十嵐猛（文56釧路）
若松顕仁（文56千歳）増井義昭（文39札幌）
山﨑郁紀（文36札幌）

帯広市・旬菜酒房海彦・山彦にて

◆道北分会

支部長　増井義昭

平成27年10月24日、道北分会が旭川市5条通り7丁目「いっぷくやてんゆう」にて開催された。当日は7名の出席を計画していましたが、驚く様な悪天候の為当日欠席3名を出してしまい、寂しい分会総会となりました。

道北分会は現在迄幹事が色々と御苦労を重て会を維持されて来たと言う継緯が有り、今回その件に関し未だ決っていない分会長の選任を行う事としていたが、出席者少数の為次回へ繰り延べる事とした。

道北分会とは、旭川市を中心とした地区とそこから北に位置する稚内市に至る広大な地域を指して言う。言葉通り日本の北辺であります。したがって非常に寒い所でありますが、その分肩を寄せ合う人々の温かさがあります。

ですが当日の防風雨それに雹交じりと恐ろしい思いを、美味しい肴と共に味わいました。

旭川市・いっぷくやてんゆうにて

◆支部新年会

支部長　増井義昭

平成28年1月7日、松苓会北海道支部新年会が行われた。札幌市中央区に有る中華料理店「好吃」にて8名の参加を得ての開催で有りました。開催案内状となった、松苓会北海道支部会報25号に載せられた「好吃」の料理写真の中央に北京ダックの姿が色鮮やかに写し出されているのを見た時には、今回の参加者数は、20名を軽くオーバーするかと思われたものの、それは大きく裏切られての人数となった。9名の出席予定が当日身体の不調により一人欠席の8名となったのである。

料理コース名が「北京ダック極」と恐しい程に嬉しい名称に大きな希望をつなげたにも係らず、参加者からの声は不平の塊で有った。

その一番の不平者は此の会のセッティングの労を取って下さった事務局長の山﨑氏で有ることから全員言いたい放題で、新年早々垢落としを

したと言う事で、今年は良い年になると言い張る始末で有りました。

新年会ですので特に議題もないのですが、各々の在学当時の教授陣の凄さが最大の話題となっておりました。それは「我が大学の先生達より凄い先生がいる大学が他に有るか」と言う話であります。当然有るわけがない。我が学校が一番と言う事であり、アルコールが入っているとしても、決して嘘にはならない話し合いで有りました。

こうして見ますと、我々松苓会会員は、二松學舍を卒業した事を誇り、二松學舍を愛しているのだとつくづく感じた次第で有ります。

札幌市・好吃にて

〈参加者〉
山﨑郁紀（文36）　安部初雄（文42）
吉野泰正（文55）　工藤昌彦（文56）
若松顕仁（文56）　永田哲之（文65）
富永貴之（文65）　増井義昭（文39）

◆支部報発行

○第52号 平成27年12月19日発行

・北海道支部総会開催しました！
・道南分会総会開催しました!!
・道東分会総会開催しました!!!
・道北分会総会開催しました!!!!
・平成28年新年会のお知らせ
・会計報告

宮城県支部

◆支部総会　支部長　千葉　仁

日時　平成27年9月19日（土）
場所　JALシテー仙台（仙台市青葉区）

概要　本年の宮城県支部の総会は、大学が9月19日に仙台市において「出張講義および大学説明会」を開催されるというご案内を頂戴いたしましたので、その催しに同窓会も参加・支援し盛り立てたいという思いで役員と相談して、同窓生に呼びかけ、松苓会宮城県支部総会を催すことにしました。

午後1時からの「出張講義および大学説明会」に、同窓生も高校生・その父兄・高校教員達と共に耳を傾けました。大学の開催目的が学生募集でありますから、同窓会員も教師およびそのOBでありました。磯水絵副学長の『宇治拾遺物語』のご講義は斬新で興味深い内容であり、飯田幸裕准教授の「コンビニでの買い物を経済学で分析する」は文学部の卒業生にとっては、身近な生活の経済学的な分析であり、面白い内容でありました。その後の個別面談等の後に支部総会が大学の先生方と共に持たれました。

本支部会員の（7名登録の内）6名が参加しまして、大学の先生方と交歓会を持ち楽しい有意義なひと時を過ごすことができました。支部長が準備した九つの資料（各種報告・母校教授のご著書・本県支部会員、特に犬飼公之氏・五十嵐伸治氏等の研究業績の一端の紹介・その他）に目を通して頂きました。

出席の会員からは、母校の発展の情況に関する交換、教員養成とその実績等の質問、県内の書道界における、某大の書道のOBの活動の情況に比較―例えば後輩を育てる審査員の不在等―の非力を不安視する声、それは中央の書壇における同窓生の審査員・リーダーの不在に直結している等の指摘。「二松詩文会」がありながら、同窓生の会員が少ない、もっと母校とのつながりを強化する必要がある等の要望も出されました。

本支部会員の人事異動として、木村裕一氏（文52）が中学校長に昇任され、上遠野裕子氏（文62）が宮城県教育庁高校教育班の要職に就任されました。これを機に支部会員の一層の奮起が期待されます。

〈出席者〉
菊池　純（文42）　田代ひとみ（文44）
二上芳久（文44）　佐々木啓充（文51）
田淵龍二（文56）　千葉　仁（文27）

東京都支部

◆女子会企画行事　支部長　矢澤喜成

「御先に失礼。」とばかりに、エレベーターの前の長蛇の列を尻目にスカイツリーに登る優越感。地上350mの雲上世界迄、僅か50秒で上昇する（分速600m。飛行機か。）感動。それらを味わったのが、平成25年10月6日の第1回女子会企画行事である。

女子会は、代表星野優子副支部長（文42）・大山由美子副支部長（文47）・高橋映子常任幹事（文53）・原由来恵常任幹事（文63）を中心として、この年に発足した。「大学卒業後、日常生活に没頭しがちな女性に、同窓の仲間と一緒に日々の生活から離れた一時を過ごして欲しい。」という趣旨であった。

第1回は「東京スカイツリーと下町散策」。第一ホテル両国で会食後、江戸東京博物館見学。そして、秋晴れの空の下、隅田川の川風に吹かれながら、水上バスで両国より浅草へ。こ

目黒区・雅叙園にて

こで浅草散策組とスカイツリー直行組とに分かれた。スカイツリー展望回廊（地上450）で想像を超える眺望を体験し、東京ソラマチ散策後解散。参加者37名。

第2回は、平成26年10月5日、「芝『うかい』と『増上寺』めぐり」。芝の「とうふ屋うかい」は、予約を取る事が極めて困難な人気店。ここで味わった豆腐懐石12品は、言う迄も無く絶品であった。会食後、案内役の方の詳しい御説明を伺いながらの増上寺見学。折しも特別公開中の徳川将軍家霊廟を見学出来た事は、眼福の至りである。台風18号の迫り来る生憎の天候ながら、参加者31名。

第3回「目黒雅叙園と目黒周辺文学散歩」は、平成27年10月4日。前回御参加の方の御要望による企画である。雅叙園に現存する貴重な「百段階段」で開催されていた「華道家假屋崎省吾の世界」を各自見学後、会食。雅叙園の伝統中華料理の味は流石である。会食後、目黒区観光ボランティアの方々の案内で、目黒不動瀧泉寺や、大円寺の五百羅漢等を見学し、大変有意義な一日となった。参加者20名。

特筆すべきは、渡辺和則前学長を始め、神奈川県支部・埼玉県支部の方にも毎回多数御参加戴き、様々な方々と交流出来る事である。この行事には、星野代表と懇意の、東武トラベル株式会社千葉西教育旅行支店長山田浩次郎氏（二松學舍大学附属高校出身）に、毎回御尽力を戴いている。星野先輩を始め、女子会のメンバーに感謝である。

◆支部報発行

○第59号　平成28年1月1日発行

・学恩　支部長　矢澤喜成
・新春を祝して 固定観念からの脱却　副支部長　星野優子
・支部女子会企画行事　第2回目黒雅叙園と目黒周辺文学散歩　副支部長　大山由美子
・神奈川支部総会報告　片山聖英
・千葉支部総会報告　渡辺大雄
・同窓生を探せ!!　プロレス愛に導かれ　高橋映子
・東京支部事務局から　中原敬二
・青山忠一名誉教授の米寿祝賀会のお知ら　馬淵裕之
・ホームカミングデー報告
・編集後記

神奈川県支部

◆新年賀詞交歓会　支部長　平野光治

平成28年1月24日（日）南国酒家横浜店にて、平成28年二松學舍松苓会神奈川県支部賀詞交歓会が開催されました。松苓会本部から小林公雄幹事長、東京支部から矢澤喜成支部長、神奈川県教員の会の藤井隆晴会長、井坂秀一同副会長をお迎えし、支部会員、賛助会員11名を含め、15名の参加となりました。支部長挨拶後、小林幹事長、矢澤支部長、藤井会長より、ご挨拶をいただきました。井上興正顧問による乾杯後、会員の皆様からご挨拶並びに近況報告をいただきました。会員として本部の廣田克己会長、山崎正伸同副会長のご出席を得るなど、緊張の中にも和やかな賀詞交歓会となりました。また、店長より南国酒家の歴史（創業のエピソード、最初に酢豚にパイナップルを入れたなどの秘話等）についてのお話をいただきました。美味しい料理をいただき、新年の良いスタートを切ることが出来ました。特に、会員や賛助会員の皆様から、神奈川県支部への今後のご協力の言葉をいただき、支部長としての責任の重さと会員の皆様への感謝の思いを強くいたしました。ご来賓並びにご参加いただきました会員の皆様に深く感謝申し上げます。

横浜市・南国酒家にて

参加者は次のとおりです。

〈来賓〉
松苓会本部幹事長　小林公雄
東京支部支部長　矢澤喜成
神奈川県教員の会会長　藤井隆晴
神奈川県教員の会副会長　井坂秀一

〈会員、賛助会員〉
廣田克己（文38）　山崎正伸（文41）
井上興正（文27）　浅居美智子（文33）
小林孝彰（文38）　平野光治（文40）
中川俊一郎（文43）中川順子（令夫人）
網野将美（文64）
鈴木久子・吉田和美（賛助会員）

◆支部報発行

○第35号　平成27年10月30日発行

・第38回支部定期総会報告
・神奈川県支部賀詞交歓会報告
・文学歴史探訪に出席して　小林孝彰
・会員の近況
・世界遺産トイレ探索の旅　佐藤　馨
・賀詞交歓会について
・支部役員名簿
・二松學舍大学教育研究会発表報告　相模原高等学校教諭　山本静雄
・資料提供への協力依頼
・26年度決算・26年度事業報告
・27年度予算・27年度事業計画
・会費納入者名簿

静岡県支部

◆支部総会　支部長　永井陵次

平成27年10月24日（土）午後一時
静岡県職員会館「もくせい会館」
〈出席者〉
〈来　賓〉
土屋　茂（図書館長・教授）
廣田克己（松苓会長）

小林孝彰（神奈川県支部事務局長）
〈支部会員〉
神津賢一郎（文27）吉野恵津子（文37）
山岡英彦（文42）鈴木隆之（文49）
江本浩二（文51）外山博世（文51）
永井陵次（文38）

来賓、会員合わせて10名、静岡県職員会館「もくせい会館」にて右の日程で、本年も静岡県支部総会を開くことができた。

冒頭、土屋教授のお話に、中国文学科の志願者が減少傾向にあり、新学科の検討も視野にあるとの事。志願者全体の首都圏集中化が言われ出してから久しくなる。国漢の二松學舎として全国に認知されていたものが、狭い地域の志願者で構成されることになれば、キャパシティーも弱まり、大学への要望、志向のぶれも大きくなるだろう。百年一日その姿を変えず存立すること自体あまり意味のないことかもしれないが、志願者の志向に合わせるのあまり、何の特徴もない大学となって、大都市に埋もれるようなことだけは避けて欲しい。そんなことはないと思うが、各大学の都心集約傾向を見るにつけ、転換点に来ていることは確かなようだ。

静岡市・もくせい会館にて

支部活動の新たな問題点は、と言うと宅配便の利用ができなくなり、支部報の紙面を縮小してでも郵送料の削減を計らなければならなくなった。支部長後継者問題から、郵便料問題まで、頭の痛いことです。

とは言え懇親会では例によって、時間を忘れ、皆様で賑やかに歓談に盛り上っていただきました。

◆支部報発行

○平成27年9月1日発行

・二松學舍大学4号館
　2014年12月靖国通りに竣工
・ご支援ありがとうございました
　前松苓会会長　神津賢一郎
・松苓会　新体制
・平成26年度静岡県支部総会
　支部長　永井陵次
・静岡県支部活動の歩み
・返信ハガキの近況報告より
・支部会費納入者
・会計報告　総会・懇親会の案内
・平成27年度松苓会事業計画

三重県支部

◆支部総会　支部長　稲垣武嗣
日時　平成28年1月23日（土）
会場　津ミートかしわぎ

本年1月23日（土）、総会をいつもながら津市にお住まいで第38回卒、山口由香さん経営のレストランにご無理を言って会場を提供して頂き11名が集まりました。事業報告、会計報告が承認された後、杉野茂大先輩顧問の乾杯に続きそれぞれの懐かしい学生時代の思い出話に時の経つのも忘れて賑やかなひと時でした。そして杉野茂顧問より93歳の新年を迎えられた感慨をうたった漢詩が披露されました。その詩を紹介します

津市・津ミートかしわぎにて

新春所感
茲歯九十有三　杉野　茂
少小疲軍役　少小軍役に疲れ
交親鬼哭多　交親鬼哭多し
衰年天所赦　衰年天の赦す所
楽易是如何　楽易是れ如何せん

総会も会員数の割に例年10名前後とやや寂しく感じていますが、そのような中で本年は納所佳子さんが改組第2回日展（書部門）に見事初入選されましたことは我々同窓生としての喜びはも勿論、県下の書道界にも女流書家として大きな花を咲かせてくれました。

今後は更に多くの参加者に呼び掛けて親睦の輪を広げ、二松學舍松苓会三重支部の大きな花を咲かせるべく頑張っていきたいと願っています。

〈参加者〉
杉野　茂（専14）稲垣武嗣（文33）
三林忠明（文34）前野克二（文37）
伊藤淑子（文38）山口由香（文38）
小川直紀（文44）加藤武俊（文49）
納所佳子（文54）竹島秀聡（文56）
岡部美由紀（文57）

群馬県支部

◆支部総会　副支部長　松本茂治

平成28年1月23日（土）ヴィラ・デ・マリアージュ高崎において、総会・新年会が行われた。講演会講師として菅根順之先生と松苓会の山崎正伸副会長にお越しいただき、出席者19名と計21名で和やかな雰囲気の中で、会は進められた。

総会は、新井支部長の挨拶に始まり、山崎副会長にもご挨拶を賜り、その後、議事は次のとおり提案された。

①平成27年度事業報告
②平成27年度会計報告
会計監査報告
③会則の変更
（役員数の

高崎市・ヴィラ・デ・マリアージュにて

変更）
④役員改選
⑤平成28年度事業計画
⑥平成28年度予算案
⑦第4回書展報告及び第5回書展実施計画
⑧29年度総会・新年会の日時、場所の確認
⑨その他　報告・連絡（松苓会85周年事業、支部活動功労者の本部への推薦、「松苓群馬45号」の発行、会報発行30年記念誌発行、支部広報活動としてのフェイスブックの利用、年会費の納入状況）

議事は、恙なく承認され、最後に昨年亡くなられた会員への黙祷の後、一時間余りで総会は、終了した。

その後の講演会では、菅根先生による「苦難期に在籍して」と題して、二松學舎が苦難の道を歩んだ昭和28年から32年までの間、浦野匡彦先生が招聘され大学が再建されるまでのお話を中心にご講演をいただいた。山田済斎先生と浦野先生との出会いや「奚疑」の書のお話など、群馬との関わりが深いものが多かったので、講演会はとても好評だった。

続いての新年会は、小石新支部長による挨拶の後、乾杯に始まり、懇談、近況報告が行われた。特に近況報告では、二松學舎大学の学生時代の話題が多く、年代によって校舎も木造校舎から沼南校舎、九段の新校舎まで世代によっての違いがあった。群馬らしく「上毛カルタ」の話題なども出て楽しいひとときが過ごせた。午後8時半には、〆を行い新年会はお開きとなった。

総会・新年会の参加者は、
新井喜義（文39）深澤賢治（文37）
金井　俊（文38）塚本忠男（文40）
須田章七郎（文40）松永昌之（文43）
都丸弥生（文47）小石さち子（文47）
高柳　薫（文47）松本茂治（文47）
金澤正教（文50）金田仁志（文53）
堀口俊介（文55）堀口　恵（文55）
宮森庸子（文56）篠原真美子（文56）
西牧秀敏（文62）塩島　翔（文73）
大井田琴（文83）　以上19名。

来賓は、講演会講師の菅根順之先生と松苓会副会長の山崎正伸先生の2名でした。

◆支部報発行

○第45号　平成28年3月1日発行

・群馬で初、女性支部長誕生　小石さち子
・支部長の任を退くにあたって　新井喜義
・新役員名簿
・松苓会85周年記念式典開催決定
・平成28年度　総会・新年会開催
・大学の教職員との懇親会開催
・ホームカミングデー参加報告
・加藤敬子さん　群馬県書道展県知事賞受賞おめでとう
・リレー随想
「教師・教えるということ」　篠原真美子
・新入会員紹介
「新社会人になって」　大井田琴
「初任者としての一年間を終えて」　佐久間毎
・会員寄稿
「会報・発行のころ」　小保方康行
「ふりかえって」　塚本忠男
「三十年目の九段坂を登って」　金田仁志
「支部報45号に寄せて」　西牧秀敏
「能楽三昧」　勅使河原覚
・書評―深澤賢治著「陽明学のすすめⅥ」　中里麦外
・支部報「松苓群馬」合冊本の発行決定
・松苓会本部より
「終身会費納入のお願い」
・計報―
・漱石の書いた屏風公開　（上毛新聞）
・群馬の書―篠原真美子　（毎日新聞）
・第四回「群馬松苓会書展」報告
「松苓会群馬県支部」公式コンテンツ
・支部会費納入方法について
・27年度会計報告・28年度予算
・27年度事業報告・28年度計画

茨城県支部

◆支部役員会ならびに総会

副支部長　青山幸雄

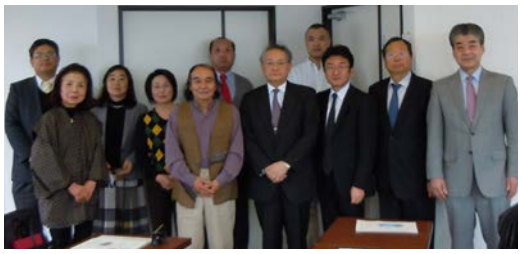
日時　平成28年2月14日
場所　水戸駅北口前中村ビル6階会議室

平成27年度茨城県支部役員会及び総会が、春の嵐の中、県内各地より会員のご出席を得て開催されました。しばらく休止状態でありました支部の活動が再開されることとなり、会場に集まった方々からは何とかしていこうという思いが窺われました。

那花支部長・小林副支部長・青山・沼田代表幹事の役員会において、運営方針等の確認と打合せを行い、総会に臨みました。

総会では、青山が司会進行役を務め、那花支部長の挨拶をいただくとともに、その中で退任の意向も示されました。続いて、小林副支部長より、前回の総会以降の活動状況等について経過報告がなされ、また、平成27年8月に二松學舎大学茨城県現職教員の会が設立された経緯についても説明がありました。

その後、青山が議長に指名され、議事進行を努めることとなりました。まず、退任される那花支部長の後任として、沼田代表幹事が選任され、就任挨拶を戴きました。これまでの間、活動の停滞していた茨城県支部を少しでも活性化させるべく尽力してい


水戸市・中村ビルにて

きたい旨の思いが述べられました。

今年度の事業報告と会計決算について小林副支部長から説明があり、新年度役員の一部補充や事業計画については、今後役員会を開いて検討した上で提案することで了承されました。

会の終わりに、大地名誉教授と西園氏より大学の現況等についてのご紹介とご説明を戴きました。

〈出席者〉

那花　隼（文36）　金　甲順（文36）
赤坂文江（文37）　沼田俊明（文40）
小林　勉（文41）　青山幸雄（文49）
玉造光英（文49）　菊池由美（文54）
矢須雅進（文58）　西園隆士（文59）
大地武雄（博10）　以上11名

近畿連絡協議会

◆松苓会近畿平成28年丙申頌春互礼会開く　事務局長　斉藤　衛

近畿支部が創設されて68年になる。その年に母校は学制改革で新制大学に昇格した。国家有為の人材養成を理念としての育英事業に挑まれた先師三島中洲先生によって、漢学専修二松學舍が生まれ専門学校を経て、今、かつては、文学部一単科大学、国漢の二松と言われる全国区大学として「東洋學の殿堂」の学問所とうたわれ、その推移の中、国際政治経済学部の開設が行われた。

戦禍により、分散授業を余儀なくされていたものが、先師三島先生の開祖の地、九段に所在を集約するの計画が果たされて全学部学生が一様に九段で学問習得が出来るようになった。思うに、昭和20年3月10日、午前2時すぎの東京大空襲により全学舎を失ってから71年間の歳月を要した。今、九段に在る二松學舍大学、その1号から4号館そうして附属の高校の館を眺めるとき、処々様々な思い出が去来する。明治10年の創立から数えて139年になり、松苓会は85年の佳節を迎え、6月12日（日）に85周年記念式典が行われる。

当日の出席者はご来賓に松苓会本部の廣田克己会長（文38）、大学の高野和基副学長のお二人。近畿出席者は末吉榮三（専12・近畿連絡協議会代表　奈良）、辻　一眞（文39・奈良県支部長、奈良薬師寺僧籍）稲垣武嗣（文33・三重県支部長、三重大学）、伊藤淑子（文38・伊藤内科クリニック　三重）、武内昭徳（文47・兵庫県支部長、県立市川高校）、世古幸生（文44・近畿連絡協議会監事、浪速高等学校　大阪）、浦壁健三（文44・㈱大阪進研会長　大阪）、斉藤　衛（文49・大阪府支部長、近畿連絡協議会事務局長、府立芦間高等学校）明治利隆（文47・和歌山県支部長、県立橋本高等学校）

大阪市・鳥よし本店にて

互礼会はご連絡のあった三名の物故者、京都・大橋　保（専15）、兵庫・藤原二三代（文41）、兵庫・森利津子（文45）の各氏に対し、弔意の黙祷を奉げ、事務局からの事業並びに決算の報告を行い、特に一昨年より実施の「近畿運営原資への協力」事業に多くのご賛同を得ておりますことの謝辞があった。

開宴は三重県支部長稲垣武嗣氏の乾杯で始まり、新会長並びに高野副学長そうして末吉代表の挨拶を総括するに「今までの軌跡とその上に立っての飛躍隆昌への路線」を三者が常に強大な一致団結心を欠かさず継ぎゆく路線を失ってはなるまい。結びとして共生・親和・努力を新しい年への誓いとなし、奈良支部長の辻一眞氏の言葉で閉会。

岩手県支部

◆岩手県支部便り

○第64号　平成27年9月23日発行
・千葉仁先輩の漢詩　宮本義孝

○特別号　平成27年10月15日発行
・支部会報をつくってみませんか
　支部長　宮本義孝
・ホームカミングデーに参加して
・最近あったこと（「松苓会報」より）

○第65号　平成27年11月19日発行
・秋山虔先生の思いで　宮本義孝

埼玉県支部

◆支部総会　支部長　町田哲夫

平成27年11月29日（日）午後一時より、東武バンケットホール上尾ポリアスを会場に、平成27年度埼玉県支部総会・懇親会を開催しました。

当日は、松苓会本部より廣田克己会長のご臨席をいただき、県会員22名という多くの参加を得て行われました。

第一部の総会は、小西明徳会員の司会進行で、松苓会埼玉県支部規約会則が審議され、参加者全員の賛同をいただき、即日施行されることになりました。この規約は全18条、会の目的、役員、地区割り（県内を四地区に分割）等を細かく規定しています。

第二部の懇親会は田口博信会員の司会進行により行われました。来賓の廣田克己松苓会長からは85周年記念事業について具体的な紹介をしていただきました。

今回の参加

上尾市・東武バンケットホールにて

者は文学部38回卒から79回卒、国際政経の16回卒と幅広い世代の参加となり、母校二松學舍大学の思い出話に花が咲きました。来年度は更に参加者を募り、85周年事業を側面から支えようという思いを強くさせる良い契機となりました。

昨年度の総会会場は「町じゅうが役者」という歌舞伎の町、小鹿野を会場に中学生が演ずる歌舞伎を鑑賞してからの総会・懇親会でした。今後は文学散歩を計画に盛り込んでほしいという要望をいただきました。シリーズ化した埼玉の文学散歩コースの開拓と会員の拡充を課題に松苓会埼玉県支部の活動を充実させてまいります。

総会参加者は次の方々です。

■来賓

廣田　克己（二松學舍松苓会会長）

■支部会員

金子廣志（文38）小林公雄（文38）
木村誠次（文39）中居功一（文39）
持田賢一（文40）佐藤　修（文41）
福嶋辰美（文42）本田和成（文42）
町田哲夫（文42）町田芳子（文42）
宮沢幸子（文42）柴田京子（文45）
中山幸男（文46）青木一弥（文47）
吉野昇之助（文47）小川伸一（文51）
千葉　昇（文53）三好行雄（文53）
小西明徳（文60）田口博信（文63）
駒井伸彦（文79）塩澤　大（政16）

北から南から

悪口千里を走る　―旧友・南岳井之上亨氏のこと

永淵　道彦（文36）

九州・福岡での研究会の仲間の依頼で、福岡教育大学に四年ほど集中講義に出かけたことがあった。その折りのことである。文学関係の講義であったが、異様に書道専攻の受講学生が多い年であった。履修単位補充の必要からであったようだ。

集中講義は半年分の講義（九十分の講義を十五回）を一週間で行うハードなものである。同じ科目を同じ教師が朝から夕方までの突貫講義である。一本調子の講義になることを避けて、講義の本筋を逸れた横道の話となることがある。

その年は書道専攻の学生が多いこともあって、横道も大いに横道となり、暫く書道関係の話になった。書道の方は、私はからっきし駄目であるが、書家の源斎・加茂忍氏（松苓会大分県支部長）と二松の学生時代、同室共同生活をしていたり、卒業後も彼に伴われて、石橋鯉城先生はじめ著名な書家の先生と身近に接する機会が多くあり、書道への耳学問豊富であったからである。

書道関係の話が学生たちの耳目を引き盛りあがったこともあり、ついつい鹿児島に居て書家として活躍している、大学同期の南岳・井之上亨氏の話に及んでしまった。内容は縷々述べないが、端的に言えば、若い時は苦労し頑張ったんだという話である。

「専門家も元は素人」「人間生まれる時も裸、死ぬ時も裸」なんてアナーキーなベースの思考の私であるので、聞き様によっては随分と与太話にとれたかもしれない。

その講義が一区切りした休憩時間に、受講生のひとりが教壇に来て少し不快な顔で「井之上南岳先生は私のお師匠です」と出しぬけに言われて驚倒した。鹿児島大学にも教育学部書道専攻があり、まさか福岡教育大学の書道専攻にも鹿児島からの学生が来ているとは端から思っていない横道話であったからである。全く迂闊であった。「鹿児島に帰ったら、同窓の永淵が集中講義で学生時代の昔話をして、井之上先生の悪口を言っていたと伝えてくれ」と返答するしかなかったしだい。

南岳・井之上亨氏とは銀座の画廊で二松・書道部展示会で会って以後、一度も会っていない。当時、二松の展示会は日展の審査員の書家が立ち寄るというほど盛況であった。卒業し高校の書道教師であった井之上氏は休暇をとって上京して来ていた。私の二松での大学院時代であったと記憶する。

井之上南岳氏とはそれほど親しくはなかったが、日展の書道部門や九州書道界での彼の活躍は、頻繁に、彼の先輩書家である旧知の吉田成堂先生（九州女子大学名誉教授）や、長年の友人である前記の加茂源斎氏から聞き及ぶところであった。現在は吉田成堂氏の後継者となり九州を代表する書家として活躍中である。

同じ九州に居るのだが、すれ違いで長年、会うことはないのだが、活躍する旧友・井之上氏の名前を新聞などで見て、私も頑張らなくてはと励まされている。それにしても壁に耳ありである。集中講義の折りのことを思い起こし口は慎まなくてはと反省しきりでもある。

（平成二十七年九月　記す）

〈編集部注〉

井之上南岳氏の紹介

書道団体名　南墨書道会

主な役職

日展会友・財団法人毎日書道会評議員・毎日書道展審査会員・公益社団法人創玄書道会常任理事・全国書美術振興会評議員・西部毎日書会理事長・九州創玄書道会委員長・養真書道研究会理事長

月刊書道研究誌（書譜）より

活躍する卒業生

今回は、マスコミに取り上げられ、松苓会室に寄せられた卒業生の活躍を紹介します。

刻字に一瞬で魅了

群馬県支部の**篠原真美子さん（文56）**は、群馬県立吉井高等学校で書道を教えています。「毎日新聞」（群馬県版）に掲載されたのは、11月19日に「刻字の表札を作ろう」テーマに授業を行った記事です。

3年生25人が、木の板に書き付けた自分の名前を彫りました。刻字の授業は、まず生徒たちが行書、隷書、楷書の中から気に入った字を選び、半紙で練習します。文字の大きさや配置を考えて、墨で下書きとなる作品を作成。薄い半紙を重ねて字の輪郭を写し書きし、その薄紙を板に貼り、糊が乾いたら書き始めます。

篠原さんが刻字を授業に取り入れたのは、2年前から。県の展覧会で初めて出会い、一瞬で魅了されたことがきっかけだと言ってます。現在は、群馬刻字協会で、独創的な作品づくりに励んでいます。

篠原さんは、「刻字は長い時間をかけて彫り、絵具で何度も重ね塗りして立体的に仕上げる。自由自在な表現が可能で。奥深い。生徒も高い集中力を保ち、詩分の作品に責任を持って取り組んでいる。」と話しています。

全日本プロレスで元高校球児・デビュー

平成27年3月に本学を卒業した**佐藤恵一さん（文83）**は、卒業後全日本プロレスに入門。

「デイリースポーツ」に掲載されたのは、10月23日後楽園ホールでデビュー戦を行ったときの記事です。

新人、佐藤恵一選手が金丸義信選手を相手に、逆エビに耐えてミサイルキック、ブレーンバスターを出すなど奮闘し、最後はハリウッドスタープレスに沈みましたが、会場を沸かせました。

東京出身の佐藤選手は、小学校1年から14年間野球を続けました。

初陣を振り返り、家族、友人ら約70人が見守る中での対戦に、「自分は一人じゃないと思いました。ひとりじゃここまで来られてない。忘れられない一日になりました。」と感激していました。ジュニア戦士の頂点を目指す佐藤選手にご声援ください。

8月13日の「朝日新聞」（宮城県版）に**梶屋陽介さん（政13）**が、10月26日の「朝日新聞」（福井県版）に**藤兼衆さん（文48）**紹介の記事が掲載されました。縮刷版で紹介します。

私の転機

かじや・ようすけ　1983年、鹿児島県の種子島生まれ。二松学舎大卒。楽器の並べ方は「洋服のセレクトショップをイメージした」。

GLIDE店長（仙台市青葉区）　梶屋　陽介さん（32）

復興へギター　工場稼働へ

昨年11月、仙台市の中心街に国産エレキギターとベースの専門店「GLIDE」をオープンしました。今年12月にはJR女川駅前にギターの生産工場を稼働させる予定で、その直営店という位置づけです。

きっかけは東日本大震災でした。発生当時は、東京の楽器店で働いていました。鹿児島出身で東北にゆかりはありませんでしたが、津波で多くの楽器が流されたことを聞き、ウクレレなどを被災地に贈る取り組みを始めました。

その後、岩手県宮古市で、ダンス大会の予選会や音楽イベントを開くなど、被災地との関わりが強くなるにつれ、「音楽を通して復興に携わり続けたい」と、起業を決めました。

楽器店での販売ノウハウをいかしつつ、復興に役立つ事業として考えたのが、ギター工場です。女川町長をはじめ「ぜひやってほしい」という地元の熱意を感じ、立地場所に女川町を選びました。

工場に先駆けて直営店を開いたのは、まず販路の確保が必要だと考えたからです。農家で育ち、豊作でも買いたたかれてキャベツを廃棄した光景が忘れられません。出荷先の事情に左右され、つくり手がもうけにくいと感じた経験から、生産者がきちんと利益を出せる事業にしようという思いが強くありました。

ギターの材料には県産のスギやヒノキを使い、研磨や組み立ての工程には地元の人も雇いたいと考えています。工場内にギター製作を体験できる場をつくって観光客も呼びたい。「ギターの町」として女川を元気にすることが目標です。

（聞き手・木村聡史）

この人に聞く

「武力に依らぬ平和を願う宗教者の会　福井」

集団的自衛権を行使できるようにする安全保障関連法の廃案を求めて結成された「武力に依らぬ平和を願う宗教者の会　福井」。同会の浄土真宗大谷派福円寺住職・藤兼衆さん(59)＝あわら市＝に、「平和」を考える手がかりについて尋ねた。

ふじ・けんしゅう　1956年、大野市生まれ。二松学舎大学大学院文学研究科修士課程修了（中国学）。83年にあわら市の福円寺を継ぐ。同寺には日本留学中の文豪・魯迅を支えた藤野厳九郎（小説「藤野先生」のモデル）の墓がある。

藤 兼衆さん(59)

願い続けることはできる

「脱武力」の訴え「理想論」の声に対し

――なぜ「宗教者の会」という名前に。

何者として言うのかを鮮明にするために、こう名乗りました。キリスト者もいます。集会には「ママの会」の方も来ました。大事なのは「武力に依らない平和を願う」ということで、多くの人たちの参加を妨げるものではありません。

――「武力に依らない」という点に「非現実的」という意見もありますが。

会を結成した背景には、私たちが憲法や平和主義、安全保障について深く考えてこなかったのではないかという反省がありました。国際的には核抑止力で平和を保つという理屈が通っていますが、武力がある限り、各地で戦闘が起こっています。今回、法案が強行採決されたことに非常に驚きました。今から勉強して、どのような意見を持てるのかと思っています。

（宗教者の中には）デモや署名は社会運動をする人に任せておけばいいと考えている人もいます。反対や異議の声を上げることは宗教的な信心に関わることなので、外せないという人が会に集まりました。仏教は基本的には平和主義で、武力を持たない、差別をしないということが大事な中心課題として説かれていると思います。永世中立国のスイスにも軍隊があり、武器を捨てようという訴えは理想論だと言われかねない。仏教的な考え方かもしれませんが、願い続けて生きることはできると思います。

――若い頃から僧侶になろうと思っていましたか。

お寺に生まれましたが、次男だったので継ぐことは考えていませんでした。学生時代、大谷派の教団問題というものがあり、宗教は何のためにあるのか考えました。また戦時中、国策に協力して若い人を戦地に送り出し、平和主義を説いてきた教えに背いた。一方、多くの門徒さんが熱心にお参りになる姿を子どものころから見ていて、教えを学びたいとも思っていました。

大谷専修学院（東京）で教壇に立った宗正元先生を通して、平和や差別の問題に向き合う人たちから学ぶ機会を得たことが、自分の原点かもしれません。

――会の呼びかけに、反応はありますか。

（国会議員宛てに投函する）はがきを取りに来てくれた人がおり、カンパが入った手紙も頂きました。願いを共にしてくれる方がいることは非常に心強く、活動を継続していきたいという思いになります。

（聞き手・山本禎子）

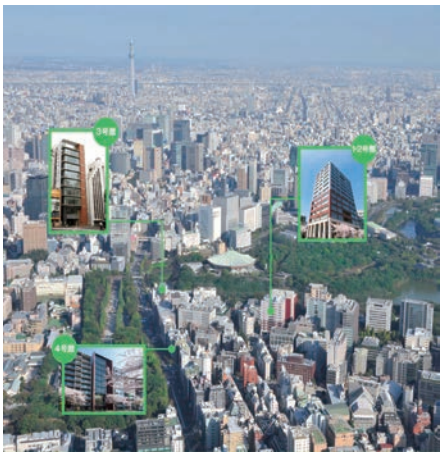
大学だより

学生の利便性に配慮したキャンパス整備なる

大学では、九段4号館建設に伴い、教育環境のさらなる充実と、より快適に学生生活を過ごせるキャンパスを目指し、N'2020 Plan「キャンパス整備計画」の一環として、九段1号館から3号館の改修工事を平成26年夏より実施していたが、昨年11月の九段1号館3階の改修工事をもって完了した。

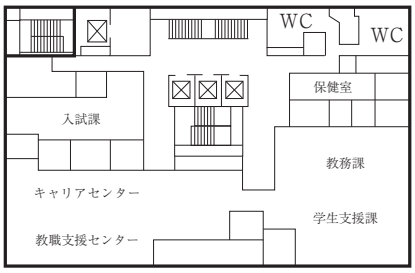
九段1号館7階は、国際政治経済学部の研究室が設けられ、地下3階には、2号館に設けられていた大学資料展示室が移っている。

3階は、教務課・学生支援課・入試課およびキャリアセンター、教職支援センターをワンフロアに集約。各種届出、各種証明書の申し込みから、学業相談や生活相談のことなど、入学から卒業までさまざまなサポートを同一フロアで受けることができる。



便利で快適な学生生活を送るためのサービスを提供することのできるフロアが完成した。

2号館1、2階にはラーニングコモンズが設けられ、2階はプレゼンテーションルームが設置されている。



柏キャンパス

生涯学習講座の案内

大学では、平成24年度から、「地域連携」及び「地域社会貢献」を推進するため、柏キャンパスで生涯学習講座を開講している。

平成28年度の開講講座が別表のとおり決まりました。

前期は、平成28年5月～7月、後期は、平成28年9月～11月に開講される。前後期とも月1～2回全5回で各90分。受講希望者は、開催日程等詳細を柏事務課にお問い合わせください。

開講講座＜前・後期＞内容

分野	講師名（50音順）	講座内容（予定）	担当講座数
国文学中国文学	大地　武雄　名誉教授	唐代文学・漢詩鑑賞	4講座
	白井　雅彦　文学部特任講師	歌舞伎	2講座
	中山　幸子　元産経学園講師	源氏物語	2講座
	原　國人　文学部元講師	伊勢物語	4講座
	針原　孝之　名誉教授	万葉集	4講座
	松田　存　名誉教授	日本芸能史	2講座
	山田　勝久　元本学講師	シルクロード文学・歴史	4講座
	録田　勲　元附属柏高校教諭	論語他	2講座
書道	伊藤　忠綱　文学部講師	書道（漢字）	2講座
	今川多佳子　文学部講師	書道（漢字）	2講座
	寺内　進　文学部講師	書道（漢字）	2講座
	福島　一浩　文学部教授	書道（かな）	2講座
経済教養	田村　紀之　本学客員教授	韓国経済・政治	2講座
	松尾　政司　国際政治経済学部元講師	日本史探求	2講座
語学	塩田今日子　文学部教授	韓国語	2講座
	ジエームス・リー　柏高校特任講師	英語	2講座
	マキオニ・メイジ　柏高校特任講師		
スポーツ・健康	田中けい子　国際政治経済学部講師	フィットネス・ダンス	4講座

※担当講座数：2講座は前・後期各1講座、4講座は前・後期各2講座

卒業生名刺交換会（異業種交流会）開催される！

平成28年2月27日、ホテルグランドパレスにおいて大学では初めての名刺交換会（異業種交流会）が開催された。文学部卒業生が66名、国際政治経済学部卒業生が33名参加した。松苓会からは、廣田克己会長が出席した。卒業生の交流を深める大変有意義な名刺交換会であった。

キャリアセンターより

大学生の就職活動については昨年より、日本経済団体連合会による「採用・選考活動に関する指針」により、企業説明会等の広報活動が大学3年次の3月から、また筆記試験や面接等の採用選考活動が大学4年次の8月から解禁となりましたが、様々な課題が指摘され、平成29年卒業予定者（新4年次生）から、採用選考活動は大学4年次の6月から解禁と再度変更となりました。この変更の結果、どのようなことが起こり得るか、平成29年卒業予定者の就職戦線について検討してみます。

まず採用選考活動は6月開始となってはおりますが、それ以前に動き出す企業も相当数あると予測されています。具合的には、3月の広報活動開始と同時に、書類選考や筆記試験等を行い、その後5月あたりが面接等の選考活動のピークとなり、6月には内々定を出す企業が少なからずでてくる、ということです。また企業ごとに見た場合、今年度の採用選考において、「内定辞退者が多数出た（＝早い段階で選考活動のうえ、内定を出していた）企業」は、いわゆる大手企業の選考活動が終了した後、概ね6月の下旬から7月上旬に選考活動を行う、一方「今年度の採用において予定の人数を確保できなかった（＝応募者が少なかった。）企業」にあっては、3月の広報活動解禁とともに採用選考活動を開始する等、ひとくちに6月開始とはいうものの、多様な採用選考活動が行われると考えられます。このようなことから、これから就職活動に臨む学生にとっては、様々な準備を大学3年次の3月までに整えておくことが肝要であったのです。そこでキャリアセンターでは、2月から3月にかけて、多くの就職支援行事や講座等を開催し、就職活動解禁にむけて取り組んで参りました。その一部を紹介します。

【キャリアゼミまとめ講座　2月1日（月）、2月3日（水）】

昨年1年間、3年次生を対象に毎週水曜日の5時限に就職に関する講座「キャリアゼミ」を開講して参りましたが、授業等の都合で受講できなかった学生のために、1年間のまとめとして開講しました。

【就活メイクアップ講座　2月3日（水）、2月26日（金）】

女子学生を対象に、就職活動においてふさわしいメイクアップについて学ぶ。

【就活女子力アップ講座　2月3日（水）】

女子学生を対象に、就職活動や、社会に生きるという事等について学ぶ講座、全学年を対象。

【時事質問対策講座　2月4日（木）】

面接等で、時事に関する質問をされることは多くあります。ここでは時事質問対策について学びました。

【男子力アップ講座】

男性の育児休業取得等、今後の社会において求められる役割や、生き方等について学ぶ講座。

【ES書く前講座　2月5日（金）、2月19日（金）、2月26日（金）】

エントリーシートを作成するにあたって気をつけること等について学ぶ。

【経営者と語る会　2月5日（金）】

東京中小企業家同友会の協力により、企業経営者と、お話しさせていただく機会を設けました。双方向のディスカッション形式で開催。参加した学生からは、「非常に緊張したけれど、色々なお話を伺って、企業や業界等について、理解が深まった」等、多くの感想をいただきました。

【テストセンターSPI対策講座　2月8日（月）～2月10日（水）】

多くの企業で採用しているテストセンターSPI試験対策と模擬試験。

【業界研究会　2月8日（月）～2月10日（水）、2月12日（金）】

製造業、卸売業、小売業その他各業界の人事担当者を招いて、各業界について学ぶ。

【論作文対策講座　2月12日（金）、26日（金）】

【採用担当者による面接特訓　2月15日（月）～2月18日（木）】

実際に企業で人事・採用担当をされている方々を招いての面接特訓（＝模擬面接）。

【東洋学園大学との合同模擬面接会　2月19日（金）】

【合同企業説明会ガイダンス　2月22日（月）～2月24日（水）、3月9日（水）】

【創縁会（合同企業説明会）　3月1日（火）～3月18日（金）】

1日あたり10社 程度の企業を招いての学内での合同企業説明会を開催しました。

【創縁会GP（合同企業説明会）　3月11日（金）】

大学近隣のホテルで80社程度の企業を招いての合同企業説明会。

教職支援センターから

充実した講座内容で採用試験指導
―「教員採用試験合格春期集中講座」を開講―

教職支援センターでは、本学の教職志望者支援の一環として、「教員採用試験合格講座」を開講している。

春・秋の授業期間中は、毎週土曜日に「基礎講座」（2年生対象）と「実践講座」（3年生対象）を開講。毎年度初めには、採用試験を控えた4年生を対象に「直前講座」を開講している。「基礎講座」「実践講座」は、1コマ90分で、年間約60コマを実施している。また、夏休みには2、3年生を対象に「夏期集中講座」を、春休みには、全学年を対象に「春期集中講座」を開講している。

現在、「春期集中講座」（2月4日開講3月25日まで）を開講中で、教室は受講生の熱気が溢れている。中でも、1年生はこの「春期集中導入講座」から合格講座を受講し、教員採用試験合格を目指している。

春期集中講座（文法講座）

「第21回二松學舍大学教育研究大会」を九段校舎で開催

昨年10月11日（日）、平成27年度第21回「二松學舍教育研究大会」が大学九段校舎1号館で開催された。

本学卒業教員支援の一環として毎年度行われ、現職教員の日頃の研究の成果を発表する場として、教育現場で抱える教員の様々な課題を解決するための情報交換の場として活用されている。

今年度は、和洋女子大学副学長の関山邦宏教授を招き、「一人ひとりを育てる教育―幕末期の寺子屋教育に学ぶ―」の講演を第一部で実施。第二部では、小・中・高等学校三校種に分かれて分科会を開催し、活発な意見交換がなされた。分科会発表者は、小学校の部、川口市立新郷東小学校の岡田順子教諭。中学校の部、埼玉県立所沢高等学校山本純人教諭。高等学校の部、埼玉県秋草学園高等学校利根川裕美教諭。

教育研究大会懇親会

中学校の部分科会

春期集中講座（2年生2月カリキュラム）

月	日	曜日	1時限目 9：00～10：30	2時限目 10：50～12：20	3時限目 13：00～14：30	4時限目 14：50～16：20	教室（予定）
2	4	木	文法①	文法②	文法③	文法④	201
	5	金	文法⑤	文法⑥	文法⑦	文法⑧	
	15	月		古文①	古文②	古文③	401
	16	火		現代文①	現代文②	現代文③	
	17	水		漢文①	漢文②	漢文③	
	18	木		古文④	古文⑤	古文⑥	3041
	19	金		現代文④	現代文⑤	現代文⑥	401
	22	月		漢文④	漢文⑤	漢文⑥	
	23	火		古文⑦	古文⑧	古文⑨	
	24	水		現代文⑦	現代文⑧	現代文⑨	
	25	木		漢文⑦	漢文⑧	漢文⑨	

春期集中講座（3年生3月カリキュラム）

月	日	曜日	1時限目 9：00～10：30	2時限目 10：50～12：20	3時限目 13：00～14：30	4時限目 14：50～16：20	教室（予定）
3	10	木		古文①	古文②	NIE ①	402
	11	金		漢文①	漢文②	漢文③	
	14	月		古文③	古文④	古文⑤	
	15	火		現代文①	現代文②	現代文③	
	17	木		漢文④	漢文⑤	漢文⑥	
	18	金		古文⑥	古文⑦	古文⑧	403
	22	火		現代文④	現代文⑤	現代文⑥	402
	23	水		漢文⑦	漢文⑧	漢文⑨	
	24	木		古文⑨	NIE ②	NIE ③	
	25	金		現代文⑦	現代文⑧	現代文⑨	

活躍する学生諸君

今年度も、学生がさまざまな分野で活躍し、大学・松苓会・父母会から褒賞されています。

大石昌輝君　空手道　重量級の部で優勝！

昨年11月に、国立代々木第一体育館で第7回JKJO全日本空手道選手権大会が開催された。

政経2年の大石昌輝君が、一般男子重量級の部で優勝しました。今後の活躍も期待されております。

今年度、多方面で活躍された学生の皆さんを次表で紹介します。

平成26年度課外活動助成費授与式

学生の各賞受賞一覧（平成27年度）

大会名	受賞内容	氏名
○個人		
第100回記念書教展	文部科学大臣奨励賞	奥平　真惟
第100回記念書教展	中国大使館賞	高坂　早紀
第100回記念書教展	第100回展記念賞	近藤　克昭
第100回記念書教展	読売新聞社賞	時田　優奈
第100回記念書教展	開明賞	高橋　睦実
第100回記念書教展	審査委員長賞	川口　佳子
第100回記念書教展	審査委員長賞	田村　里奈
第100回記念書教展	審査委員長賞	田中　亮太
第100回記念書教展	審査委員長賞	岩崎　光穂
第100回記念書教展	審査委員長賞	紺野　真生
第100回記念書教展	審査委員長賞	野村　百加
第32回読売書法展	入選	田村　里奈
第32回読売書法展	入選	高橋　睦実
第32回読売書法展	入選	田中　亮太
第32回読売書法展	入選	竹下　友崇
第32回読売書法展	入選	森　紡葵
第32回読売書法展	入選	山本　里緒
第32回読売書法展	入選	武内　すず
第44回全書芸展	東京都知事賞	川口　佳子
第44回全書芸展	秀逸	榎本菜々美
第44回全書芸展	優作	武内　すず
第44回全書芸展	優作	藤木　実樹
第67回毎日書道展	U23大字書部奨励賞	島田　葉月
第67回毎日書道展	U23大字書部入選	和田圭菜実
第59回千葉県短歌大会（千葉大会）	学生の部　天賞	大日向智貴
第59回千葉県短歌大会（千葉大会）	学生の部　地賞	後藤佑美香
第59回千葉県短歌大会（千葉大会）	学生の部　人賞	田中　七空
柏市立図書館ビブリオバトル	チャンプ本賞	西　翔太
日本財団ハンセン病ビブリオバトル	チャンプ本（優勝）	横森夏樹里
東都大学軟式野球秋季リーグ戦	本塁打王　打点王	沢井　椋
東都大学軟式野球春季リーグ戦	打点王	野本　貴亮
東都大学軟式野球秋季リーグ戦	ベストナイン	野本　貴亮
東都大学軟式野球春季リーグ戦	優秀選手賞　ベストナイン　打点王	林　京佑
第1回大学軟式野球国際親善大会 Guam	日本代表（投手）	沢井　椋
第7回 JKJO 全日本空手道選手権大会	一般男子重量級の部優勝	大石　昌輝
第62回秋季千葉県学生剣道大会	第3位	狩野　太地
警視庁対関東学生剣道連盟親善試合	選手	狩野　太地
第27回全日本学生テコンドー選手権大会	トゥル成年男子有段の部準優勝	田宮　啓佑
○団体		
第42回全国学生岩岳スキー大会	男子予選会総合第6位	VOGEL.R.S.C
第42回全国学生岩岳スキー大会	女子総合第10位	VOGEL.R.S.C

平成28年度二松學舍大学大学説明会開催日程

平成28年度の二松學舍大学による、地方入試説明会の開催日程（予定）が決定しました。この説明会には、大学の関係者が出席します。

同窓生にとっても母校の最新の情報を知るよい機会となります。大学関係者との懇談や支部会員相互の交流の場とすることもできますので、奮ってご参加ください。

開催都市名	開催予定日
香川県・高松市	平成28年6月11日(土)
青森県・青森市	平成28年6月18日(土)
秋田県・秋田市	平成28年6月19日(日)
栃木県・宇都宮市	平成28年6月26日(日)
鹿児島県・鹿児島市	平成28年7月23日(土)
新潟県・新潟市	平成28年7月30日(土)

※大学説明会は、午後に実施されます。日程等は予定ですので、変更や中止の場合もあります。詳細は、松苓会本部までお問い合わせください。

教員免許状更新講習のお知らせ

1　実施日程

平成28年8月8日～12日

2　会場

二松學舍大学九段1号館(予定)

3　受入人数 100名

詳細は、大学教職支援センターにお問い合わせください。

TEL 03-3261-1375

松苓会の歩み(6)

前号（53号）で二松學舍の戦後の混乱期について触れたが、今号もそこから始める。

戦後の苦難期からの脱却

二松學舍九十年史には次のように記載されている。

「二〇年三月一〇日、戦火によって全焼した校舎は、関係者の努力によって、二二年に再建され、次いで二三年二松學舍高等学校が設置され、二四年には二松學舍専門学校が新制大学に移行した。この間、専門学校、高等学校、新制大学のいずれも、当時の社会情勢によって入学志願者が少なかったのと、当時の財団法人及び学校当事者の運営の不手際から、経営は漸次困難に陥り、教職員に対する給料の遅配・欠配、支払遅滞が重なるに至った。

財団法人理事・二松學舍専門学校教授塩田良平は、二二年一二月、二松學舍専門学校長及び財団法人二松學舍理事長に就任し、更に二三年三月、新設の二松學舍高等学校の校長を兼ね、二四年には二松學舍大学学長に就任し、経営と教育、両面の責任をもつ立場にいたったが、経営の不振は挽回できなかった。

この間、宇都宮徳馬、菅原通済等を理事に推薦し、経営を再建せんとしたが成らず、負債も増え、この間理事の交替が頻繁に行われた。二四年八月には塩田良平が理事長を辞任し、後任理事長となった足立欣一も一二月八日に辞任したので、理事長はその後任を置かず、代表理事の事務は当分の間、塩田理事が取扱うことに決定した。

二四年一二月一五日の理事会は、塩田代表理事事務取扱の提案により、二松學舍大学を東京文科大学と改称すること、松浦昇平が二松學舍に二百八十二万円を寄付すること等を条件に、同人を財団法人二松學舍理事に推薦すること及び経営の一切を同理事に委任することを決定した。」

昭和26年2月6日塩田良平代表理事は、経営・運営上の責任をとって理事、学長、校長を辞任。一部の教職員や学生の復職運動がおこったが、結局退陣することとなる。塩田良平を支持する国文学系の教授も多数辞職する。この間の経緯を塩田学長辞任後の学長に就任した那智佐伝は『中洲会誌』（復刊第3号　昭和26年12月発行）に次のように記す。

本年二月初めに、嘗て理事長を兼ねたることありし塩田良平学長は、経営上奈何とも致し難き場合に立到り、顧問国分先生等と相談の上学長を辞任せられ、教授は旧のまゝに留まりくれるやう勧めたれども、久しく学究に遠かり居りたる故、此の際静に精研を積み度いとて併せて教授をも辞退に相成りました。（中略）而るに国文科教授講師は一斉に学長と進退を共にする理由で、連名辞職せられたのは、その情誼多とするに足るやうなれども、塩田学長を理事会が多数決を以て教授までも辞去を強要したと見做して、新聞社員を招きて事実相違の報告を為し又誤解せる声明書を広く各処に発表し、絶えず悪声を放つのみならず、学生に一々諭示して、斯の如き学校には在学の価値なしと、百万誘導教唆を尽くし、恰も本学の潰滅を見ずんば已まざるの態度に出でられしは、実に遺憾嘆息の至りであります。為に真相を察し得ざる学生は、僅に数名を遺して幾ど全部他校に転学するの不幸を見るに至ったのであります。是に於て理事長常任理事等は国文科教授の補充を急ぎ、（中略）教授陣を一新し、五月以来旧に優れる授業を開き居り、学生も新に五十有余名の入学を見て、高校生三百余名と共に兎に角維持継続を得たるは、幸なりと謂ふべきである。（中略）塩田学長の時に東京文科大学と改称せしは、校友は勿論旧縁故者より、謂はれなしとの議論を承り、十月十日の理事会にかけし処、尤至極なり宜しく二松學舍大学に復活すべしと議決せるも、入学要覧等に既に広告し、急に改め難き事情も之れ有るを以て、来る二十七年五月以後に其の運びに致し度くと取極めました。（以下略）

同年2月7日、松浦昇平が後任理事長に就任し法人経営に当ったが、改善には至らず、更に、教職員の解雇などもあり、理事長に対する不信の声がつのった。昭和30年3月には、教職員は教職員組合を結成。身分保障、待遇改善、教権の確立、学長の権限確立等を要求する。学内の混乱は新聞等でも報道され、昭和30年6月13日には衆議院文教委員会で「学校教育に関する件（二松學舍大学事件）」として取り上げられる。

後に松苓会第8代会長となる下河部得三（4回卒）は、『茯苓』第4号に、「事件は翌昭和三十年の朝日

東京新聞
東京文大（二松學舍）に危機
学長辞職、経営難明みへ

東京新聞「東京文大に危機」
（『資料に見る二松學舍百二十年』から）

新聞によって始まった。四月十七日の朝である。『百五十人が登校拒否・二松學舍大学付属高校　学校の方針に反対』という報道の火蓋が切られて、更に十九日には、朝日の外に毎日が、那智学長の顔写真と団交を要求する教組側ともみあう理事者側の写真が、堂堂と掲載されて『経営めぐり紛糾する二松學舍・〝理事長専横〟と闘争・教職組団交、深夜までもむ』の暴露記事で、二松學舍は続々と他紙（私学時報、週刊読売、日本経済等）の好餌にされ、恥を天下にさらして仕舞った。私は四月二十五日現在で評議員に選任され、否応なしに争議の渦潮に巻込まれていった。」と記している。

事態収拾に向け臨時評議員会が9月14日、19日、23日と開催されたが、事態は収拾されず、9月26日の評議員会を迎える。この臨時評議員会の席上、松浦理事長を罷免する動議が出され、記名投票の結果、松浦理事長の罷免が決定した。

二松學舍大学新聞創刊号

10月6日に新理事会が発足し、那智佐伝が理事長に就任した。11月11日の新理事会では、さきに住友銀行に担保流れとなって、所有権が同銀行に移っていた建物を買いもどす資金を、松苓会において調達することを決定、なおその一部を松苓会において使用することを承諾した。

かくして法人経営の混乱は収拾され、新理事会は復興に向けて全力を傾注することとなる。

これら法人経営の混乱を中心となって収拾に努められたのが、後に常任理事（昭和32年4月）、理事長（昭和37年4月）となる第2回卒の浦野匡彦であり、又専門学校卒業の同窓生である。

浦野匡彦が法人運営の責任を負ってからの母校の発展については、二松學舍九十年史、百年史などに記されているとおりである。

浦野匡彦松苓会長就任

昭和34年8月2日に松苓会の委員会が開催され、これまで会長の石川梅次郎（1回卒）にかわって浦野匡彦を会長に選出する。この間の経緯を浦野会長が大学新聞に寄せている。

松苓会の皆さんへ　浦野匡彦

専門学校第1回卒業の石川梅次郎さんが、長い間松苓会長として会の発展のため努力されていたが、今度の改選期に際して「あまり長いからこの辺で第1回卒業生以外の人に会長を引受けてもらいたい」という事前の申出もあり8月2日の推薦委員会で私が会長の指名をうけた次第です。同窓会の会長という役は何れの学校でも一種の看板であり、実際の仕事は学校に奉職している同窓生が一切きりもりしてくれるものであるのが通例のようです。この点から考えると看板としてはあまり立派ではないしまたその器ではない。校内の同窓生に仕事をしてもらい全国の同窓生に連絡を保つ意味からすればあるいは私も今のところ適任者の一人かとも自惚れお引受けすることにしました。二松學舍大学の現状否今後は同窓生の皆さんに期待するものが多大であります。私は今後ますます関係者と共に母校の興隆に力をそそぐと共に同窓の皆さんと緊密に連絡を保ち種々の問題を御願いせねばならぬと思います。近日中に関西の支部はじめ各地の同窓会に機会をとらえては御伺いするつもりです。何卒宜しく御鞭撻下さい。紙上を通じ御挨拶旁々御願い申し上げます。（大学新聞第85号）

河野氏停雲誌綴り

これよりさき、昭和33年12月に二松學舍大学新聞が創刊される。大学新聞には松苓会の活動等の記事が掲載され、松苓会員にも配布された。昭和62年12月に松苓会報が発行されるまで大学と松苓会員、松苓会本部と会員を結ぶ情報紙として、松苓会の機関紙的な役割を果たしていた。

停雲会（専門学校第12回卒同期会）

専門学校第12回卒の同期会「停雲会」については、大学新聞や松苓会報に何度か紹介され、松苓会報第7号（平成5年7月10日発行）には、同期の杉田寿夫氏が「『停雲会』の歩みと現況」と題する記事を寄せ、それまでの開催記録をまとめている。同会は会誌『停雲』を発行していることはわかっていたが、大学や松苓会には納められておらず、目にすることがなかった。今回は、末吉榮三顧問の仲介により同期の故河野卓氏の奥さんから、河野氏が残していた会誌『停雲』既刊号の綴りをお貸しいただいたので、それについて記す。

12回生の停雲会は、昭和48年8月18日に第1回の会合を母校の会議室で、懇親会を千鳥ヶ淵のフェヤーモントホテルで開催したのを皮切りに、毎年幹事を交代、全国各地で継

停雲誌第４号

続して平成8年まで開催している。

会誌『停雲』は昭和49年に第1号を発行、平成8年10月の第24回停雲会「湖北近江の集い」を掲載した第24号まで発行している。

「停雲」とは、親友を思うこと。陶淵明の「停雲」の詩の序に「停雲思親友也」とあるのに基づき、同期の高木正一氏が命名、『停雲』誌の題字も同氏の揮毫という。

『停雲』誌の内容は、毎号前年度の停雲会の様子を記し、母校の思い出や近況報告、随想等を欠席者の分を含め掲載し、会員名簿を付している。12回生は、昭和14年4月入学、昭和16年12月繰り上げ卒業である。卒業者数56人。

『停雲』第1号掲載の名簿に同期生の戦死者の名前を掲載している。同4号（昭和52年発行）には、河野卓氏が同期の物故者について調査した結果を、「物故学友を偲んで」の文章の後に記録している。戦死者については、兵役歴、戦死された場所等についても調査されている。河野氏が調査し判明した戦死者は13人（13回卒1人を含む）である。

今回『停雲』誌を読んで同期の戦没者を正確に把握し、それを記録にとどめていることに感激した。毎年、8月になると戦没学徒、戦没同窓生のことがニュースになる。大学によっては大学又は同窓会が戦没学徒、戦没同窓生の記録を機関として調査し纏めているところがあると聞くが、本学において、戦没同窓生が何人になるのか正確な記録は残っていない。『茯苓』や百年史等の回想録の記事に同期生が個々に学友の戦死に触れていることはあるが、これらを調査し纏めた正確な記録はない。

河野氏の調査に敬意を表するとともに、『停雲』第4号掲載の文章を次に掲げる。

物故学友を偲んで　河野　卓

「国破山河在　城春草木深……」

敗戦の虚脱感に打ちひしがれて、これから如何にして生きて行こうかと思案にくれ、焼跡に呆然と立ちすくんだ時、誰しもこの杜甫の蜀相の詩を思い出したのではないだろうか。

戦争はすべての人々の運命を大きく変えた。軍隊に身を捧げた多くの人々は戦場で散ってゆき、安泰であるべき銃後も戦火の及ぶ所となって、実に多くの老幼婦女子までがその犠牲となって死んでいった。そして、辛うじて生き残った我々も戦後の種々の苦難の末に、漸やく物心の安定感を得るに至り、親しかった人々と交流し得る余裕を得た頃卒業以来消息すら分らなかった多くの学友の死を知り、暗然たる思いを抱いたのは私独りのみではありますまい。更にその上、停雲会名簿を見ても現在尚消息不明の方々が居られる現状である。

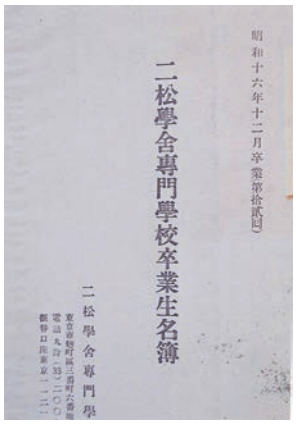
我々の世代は、既に小学校時代から戦争という特異な背景に覆はれており、しかもその卒業すらも戦雲から逃れることの出来ぬ卒業即入営という、平和な時代の人々には想像できぬ、苛酷な学徒動員による繰り上げ卒業という異常な卒業であった。その特異な背景にあっては学生の特権であった徴兵延期願も力なく国のためという大義名分の下に大半の学生たちは否応もなく入営せざるを得なかった。

その結果、二〇〇万の戦死行方不明者、一〇〇万の民間人戦争犠牲者を出し、日本は無条件降伏という屈辱条件を呑んで敗れたのである。そして、我々同期生の中からも多くの尊い犠牲者のある現実を眺め、あるいは戦中戦後その職務で亡くなられた学友のあることを知った。学窓で共には励み合いつつ明るく未来を語り合った学友たちの、春秋ある前途を空しくされたその死を惜しみ、深くその御冥福をお祈りする次第である。

戦争さえなかったならば大半の物故学友は今尚御健在な筈であり、平和な時代がそのまま続いた平和な同窓会であった筈である。しかし乍ら現実は戦争犠牲者を多く出した同窓会であったから、私は深い哀感を抱いて学友の死を惜しんだがため、福岡総会幹事としては勇み足の独断専行に走り、「物故学友の思い出」と題する企画を発表した次第であるが、会員の総意を無視した行きすぎとの忠告もあり、私も深くその非を反省して私個人の御報告と致しましたが、私の心情も御理解願いたく茲にお詫びをかね御寛恕を乞う次第です。

「古来征戦幾人回」の哀歓が小生には終世つきまとうであろうが、戦争のために亡くなられた学友、その後病死された学友各位の霊に合掌黙祷しつつ、友の死について無関心であり得なかった私の心境を披歴する次第であります。

次に、河野氏の綴りの中に、「昭和十六年十二月卒業（第拾弐回）二松學舎専門学校卒業生名簿」の写



専門学校第12回卒業生名簿

松苓会支部長名簿

平成 28 年 3 月 1 日現在

岡山	永瀬　清	文39	
広島	平岡　才二郎	文26	
山口	俵田　賢嗣	文40	
徳島	大倉　明子	文47	
香川	大西　邦美	文40	
愛媛	上田　善達	文38	
高知	坂本　和生	文37	
福岡	永淵　道彦	文36	
佐賀	吉原　一寛	文39	
長崎	黒瀬　孝志郎	文38	
熊本	塩永　英文	文52	
大分	加茂　忍	文36	
宮崎	宮崎　宣幸	文41	
鹿児島	岡元　正昭	文31	
沖縄	金城　健一	文38	
新潟	坂井　作福	文42	
富山	小島　雄貴	文47	
石川	菅野　也成	文50	
福井	中道　宏佳	文58	
岐阜	竹内　人秀	文55	
静岡	永井　次陵	文38	
愛知	松田　文博	文55	
三重	稲垣　嗣武	文33	
滋賀	角井　暢良	文49	
京都	廣田　男康	文54	
大阪	斉藤　衛	文49	
兵庫	武内　徳昭	文47	
奈良	辻　一	文39	
和歌山	明治　隆利	文47	
鳥取	小谷　公章	文38	
島根	江角　仁	文39	
北海道	井垣　義昭	文39	
青森	増本　博孝	文44	
岩手	柴葉　義孝	文32	
宮城	宮浦　仁	文27	
秋田	千藤　三基	文41	
山形	齋村　裕	文38	
福島	北田　博	文32	
茨城	沼田　俊明	文40	
栃木	寺内　進	文49	
群馬	小石　さち子	文47	
埼玉	町田　哲夫	文42	
千葉	辻　将一	文45	
東京	矢澤　喜成	文50	
神奈川	平野　光治	文40	
山梨	板山　俊介	文36	
長野	関　保典	文35	

しが綴じられている。名簿は、専門学校卒業生の就職先開拓のために作成されたもので、「昭和十六年十二月卒業スベキ者」として本科54人、別科1人、計55人の氏名が書かれ、個々人の「校内役員その他等」「運動競技」「趣味」「出身学校」「兵役関係」「本籍」「生年月」が記されている。「兵役関係」では、55人中42人に「徴集延期」とあり、この年の12月繰上げ卒業とともに徴兵検査が待っていたことになる。（文責　小林公雄）

松苓会報原稿募集

会員相互の交流、情報交換の場を積極的に提供するため、会員から原稿を募集することといたしました。

内容は、会員の近況報告（例えば、書道などの「個展を開催する」「開催した」「受賞した」）、母校や恩師の思い出、漢詩、短歌、俳句などの文芸作品。同期会、クラブOB・OG会を開催する、開催したなど。

字数は、800字程度まで。短信（50字位）でもかまいません。

締切　特に定めません。会報は年2回（10月、3月）発行しておりますので、適宜掲載いたします。

支部長交代

大阪府　斉藤　衛（文49）
平成27年10月1日付

青森県　柴垣　博孝（文44）
平成27年12月1日付

群馬県　小石さち子（文47）
平成28年1月1日付

茨城県　沼田　俊明（文40）
平成28年2月14日付

松苓日誌抄

平成27年

9月1日　学校法人二松學舎評議員会、理事会が開催され、水戸英則理事長再任

26日　常任幹事会開催。終了後85周年記念事業実行委員会開催

30日　学位記授与式（春セメスター）国際政治経済学部4人、文学研究科　博士後期課程修了2人

10月11日　教育研究大会開催。廣田会長出席

13日　神津賢一郎前会長、大学の特別功労賞受賞

21日　法人との連絡協議会開催。法人側から菅原学長以下6名出席。松苓会から廣田会長以下三役出席

11月1日　大学学園祭（創縁祭）を学園祭実行委員の案内で廣田会長以下三役見学。大学父母会役員と交流

石塚法子（文38）・木内美千子（文39）の両氏「貞門徐風会書展」の案内で松苓会室訪問

7日　基本問題検討委員会の第1回会議開催

10日　関東東北豪雨で被災された会員1名に見舞金送付

16日　江村春彦氏（文57長野日本大学中学校）松苓会室に来訪

11月21日　中洲記念講堂で「論語の学校」開催され、廣田会長、小林幹事長、佐藤事務局長参加

23日　大学の漢詩コンクール表彰式に廣田会長参列

12月6日　ホームカミングデー開催

平成28年

1月7日　学校法人二松學舎の新年互例会が開催され、廣田会長以下三役参加

25日　大学で所蔵した夏目漱石墨書の漢詩屏風を報道関係者に公開。26日の読売、朝日等の全国紙や地方紙で報道される

2月1日　毎年度助成している教育振興資金百万円を、学校法人二松學舎に寄付

6日　専門学校第一回卒業生の「沖山光研究会」開催される

25日　響谷昇氏（文56明蓬館高校）学校紹介のため松苓会室に来訪

2月27日　大学主催の卒業生名刺交換会（異業種交流会）がホテルグランドパレスで開催され、廣田会長が出席。参加卒業生99人

3月12日　常任幹事会開催。終了後85周年記念事業実行委員会開催

16日　平成27年度卒業式が中野サンプラザで挙行され、廣田会長参列し祝辞を述べる。松苓会から卒業生に卒業記念品（名刺入れ）を贈呈。式後、父母会主催の卒業パーティーが帝国ホテルで開催され、廣田会長出席

「二松學舍大学の挑戦」の紹介

本書は、経済評論家の鶴蒔靖夫氏が書かれました。

『二松學舍大学―時代を超えて受け継がれる建学の精神』と題し、昨年十月にIN通信社から刊行。定価は税抜きで千八百円です。

昨年度、ラジオ日本で鶴蒔氏がパーソナリティを務める人気対談番組で水戸理事長と対談したことが契機となり、本書が出版されました。

大学淘汰時代に必要な改革とは!?

明治10年創立。夏目漱石・犬養毅・嘉納治五郎・平塚雷鳥など、過去の偉人から

壮大な歴史と伝統を脈々と受け継ぐ二松學舍が、いま「N'2020 Plan」を掲げ、未来に向かって新たなステージへと突き進む。

本の帯にはこのように書かれております。ぜひご一読ください。

寄贈図書

平成27年9月以降の寄贈図書は、次のとおりです。

●説話と横笛
平安京の管弦と楽　磯水絵著
勉誠出版（二千八百円）

●陽明学のすすめVI
人間学講話「三島中洲・二松學舍創立者」　深澤賢治著
明徳出版社（二千二百五十円）

●川端康成自殺の真相一・二・三
岸元史明著
国文学研究所（各二千円）

寄付者芳名

平成27年3月1日から平成28年2月末日までにご寄付いただいた方のご芳名を掲載します。（敬称略）たくさんの方のご協力に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。（一口千円）

五十口
早崎　静子　文41

三十口
木村　正雄　文25
重田　佳子　文38

二十口
金輪　末良　文25

十口
神津賢一郎　文27
矢野　紀子　文33
塩崎　照代　文34
椎木　伸治　文37
椎木　雅子　文38
東　一雄　文38
廣田　克己　文38
山口　由香　文38
飯塚　力　文39
三嶽　道子　文39
佐藤　修　文41
飯田えり子　文43
唐沢小夜子　文43
松永　昌之　文43
宮下　宗樹　文43
上原石名位　文44
黒沢　敬二　文45
黒岩美津子　文47
柴田　善達　文48
佐賀　敦司　文49
柴田すま子　文49
田中　裕子　文49
杉田　由美　文53
奥澤　博行　文57
吉川　史子　文62
藤野　千絵　文64
柴田　承寛　文78
大地　武雄　文博10
沢登　幸治　政05
薮崎　久雄　政09
宗村　雅世　政12
石川　卓巳　政20

七・五十口
吉田　公夫　専20

五十口
末吉　榮三　専12
吉田幸一郎　文26
斉藤　祥子　文32
新栄　保代　文34
石井　孝雄　文39
小林　政明　文39
杉山　葉子　文44
松本　茂治　文49
高橋　映子　文53
安倍　洋子　文54
山口　直美　文63
谷　治子　文67
舘野　仁　政10

四十口
神河　秀春　文47

三十口
藤田　佳應　文24
鍋谷　愛子　文27
高橋かほる　文33
目黒　泰　文38
田丸　勉　文39
本田　和成　文42
崎山マユミ　文44
深澤　光子　文44
菱山　英子　文47
吉田　淳一　文57
飯田　秀樹　文59
田口　博信　文63
杉本　匠　政21

二十口
中野　富弥　専16
植竹　佳恵　文26
浅居美智子　文33
豊田美知子　文38
長野　泰雄　文38
青野　有美　文41
清水　登　文42
浅野　進太　文42
高木　玉藻　文48
石渡　康子　文55
吹原　礼憲　文63
上田　道子　文68
池谷　賢志　文69
吉田　孝幸　政09
柴山　侑大　政15

一十口
樋口　文雄　文24
鈴木　景義　文25
北口　洋子　文35
前野　克二　文37
佐藤　寛　文38
須川　裕　文42
小川　紀子　文44
鉄尾　明彦　文44
伊藤　文雄　文45
西川冨士子　文45
関根　郁江　文47
長田香陽子　文48
大塩　毅　文50
力間　尚子　文50
宮森　庸子　文56
山本　真弓　文56
楠　康子　文57
小山　幸孝　文61
長野　賢司　文64
長野　佳保　文64
高橋　妙子　文71
柏原　一仁　文76
杉山　朋秀　政04
石田　公一　政15
大瀧伸太郎　政21

表紙写真

10月から3月までの半年、大学1号館の松苓会室から、晴れた日の午前中はいつも南西の方角に富士山が見えます。黒い富士山から白富士に変わる姿も感動的です。信仰の対象として、文化遺産で世界遺産に登録された富士山を見ると、神々しさに胸を打たれます。新宿の高層ビルの奥に聳える富士山をぜひ見に来てください。

二松學舍松苓会報 No.54
創刊　昭和62年12月1日
発行　平成28年3月16日
編集　二松學舍松苓会
住所　〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話　03-3261-7408
振替口座　00180-5-160343（郵便局払込取扱票）
印刷　㈱サンセイ

編集後記

松苓会報54号をお届けします。卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。昨年の12月6日のホームカミングデーの記事や、退職される先生の思い出話や、卒業生の活躍などの他に、各支部活動記事を載せました。松苓会の歴史を綴った記事も佳境には入ってきました。読み物として楽しんでもらえる会報記事など、少しずつでも変えられたらよいと思っています。卒業生として松苓会活動に参加して、ご意見やご提案など賜れれば幸いです。

二松學舍大学（松苓会）
ホームページ　www.nishogakusha-u.ac.jp
松苓会 E-mail　shourei@nishogakusha-u.ac.jp